

優良賞

江差町立江差北中学校 3 学年 ^{やまだ}山田 ^{ゆめの}優姫乃
「今を生きる」



みなさんは自分の命日を知りたいですか。それとも知りたくないですか。きっとどちらもあると思います。もし知ったら命日が近づくにつれ焦って怖くなると思います。しかし知らなくても、いつ死がくるかわからなくて同じように怖いと思うはずですよ。

今の世の中では残念ながら命日を確実に知ることはできません。

死に方についても、苦しむのかそれとも楽なのかわかりません。確実にわかっているのは、人はいつか死んでしまうということ。それがいつなのかは誰にもわからないし、そのことがたくさんの人を苦しめているのです。私は人は死に対する恐怖心をかかえながら生きていると感じます。しかし死というものに向きあい、深く考えてみることで、恐怖心を軽くできると思うのです。

死ぬのが怖い理由として死んだら人に忘れられてしまうということがあると思います。3年前、曾祖父が亡くなった時、私はすごく辛くて、大好きだった曾祖父のことを絶対に忘れるわけがないと思いました。けれど、日が経つにつれ声がうまく思い出せなくなったり、顔がぼんやりとしか思い出せなくなったり、曾祖父の記憶が段々と薄れていっているということに気がつきました。それは私にとってとても苦しく、私も死んでしまったら忘れられてしまうんだと思うと、みぞおちのあたりからふつふつと沸いてくる不安に襲われました。

そんな時、曾祖父の部屋を訪れてみると壁にはられたカレンダーが目にとまりました。そのカレンダーは文字でびっしりとうめつくされていました。「曾祖父の字だ」そう思った私はカレンダーの字をすみからすみまで読みました。そこにはその日の仕事の内容が丁寧に書かれていたのです。私の家は父まで続く農家です。曾祖父が頑張って積み重ねてきたことや思いが曾祖父がいなくても確かに残っている。そのカレンダーを見て私はそのことに気がついたのと同時にとても素敵なことだと思いました。誰かが亡くなってしまった後その人の記憶が忘れられずに残ったり、そのままの形として残るのは実は難しいことなのかもしれません。でも自分が頑張ってきた足跡は違う形としてあらわれと思うのです。だから一生懸命生きるのは無駄ではないと思います。忘れられてしまうかもしれないけど、きっとどこかで自分が生きた証が残ると思います。

その他にも死んだ後の世界が怖いということもあると思います。死んだ後はどうかなんて誰にもわかりません。だからこそ怖いのかもかもしれませんが、誰にもわからないならば、難しく考える必要はないと思います。また、日常が終わってしまうことへの恐怖心もあると思います。人は失ってから大切だったと気づくことが多いと私は思います。今、あたりまえに交わしている、「ただいま」「おかえり」も、あと何回言えるのかわかりません。あたりまえだと思っていたことが急に終わってしまうと、苦しくて、寂しくて。でも、日常が終わってしまうのが怖いということは日常の大切さに気づいているということだと思います。私は失ってしまう前に気づくことは素晴らしいことだと思います。だから日常が終わってしまう前に、大切な人に感謝を伝えてほしいです。

結局、怖いものは怖くて、明るく前向きに生きるなど、そんなに簡単にできるものではないと思います。死は怖く、悲しいものでしかないと思ってしまいます。ですが、死があるからこそ、今を大切にできたり、大切な人ができるのではないのでしょうか。死があるからこそ人を助けたいとか、思いやりの心だとか、愛したいという気持ちが生まれるのではないのでしょうか。でも死があって一度きりの人生だからこそ、自分の思いどおりにならなければ、気に入らないという気持ちがうまれたり、自分の世界に入ってしまったりするから争いがいつまでも終わらないのかもしれない。

今を生きていると、嬉しいこともあるし、苦しいこともあります。でも、その経験はいつか自分へのプレゼントとして返ってくると思うのです。

死はいつくるかわかりません。だからこそ日常に感謝し、やってみたいことにチャレンジして、死がくれたプレゼントを大切に自分の中にしまっておき、今日も私は強く生きます。